

トビウオ通信 (H23 第 3 号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 23 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 23 年 3 月に開催された東シナ海～日本海南西海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容を基に、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 23 年度上半期（4～9 月）の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔平成 23 年上半期(4～9 月)〕

マアジ:前年を上回る

マサバ:前年を上回る

カタクチイワシ:前年並み

ウルメイワシ:前年並み

マイワシ:低調ながら前年を上回る

※ 本文中で「上半期」は 4～9 月、「下半期」は 10～翌年 3 月、「平年」は過去 5 カ年（平成 18～22 年度の各上半期）の平均値、「前年」は平成 22 年度上半期をいいます。

マアジは前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、平成 20 年以降増加傾向にあり、平成 22 年は前年を上回る 3 万 8 千トンでした（図 1）。沖合域の今後の漁況は前年並みに推移すると予測されています。

一方、鹿児島県から山口県の沿岸域における平成 22 年 11 月～23 年 1 月の漁獲状況は前年・平年を上回りました。今後は前年・平年並みに推移すると予測されています。

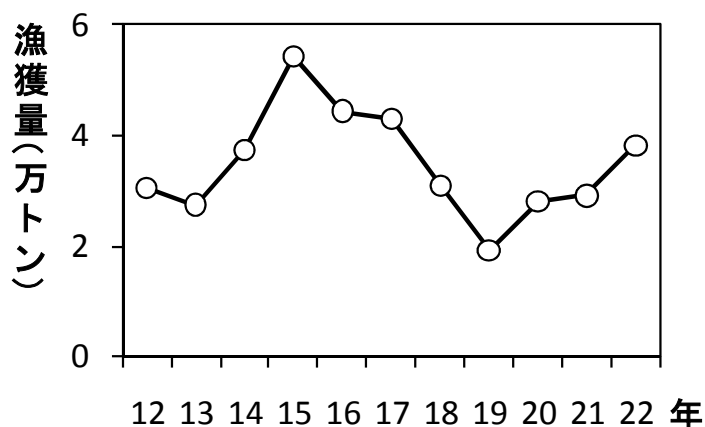


図 1. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマアジ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 12 年度以降、

2～3万トンで横ばい傾向にあります。平成22年度下半期は15,623トンの漁獲があり、前年同期（7,922トン）の2.0倍、平年同期（10,753トン）の1.5倍でした（図2）。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳～2歳魚の山陰沖への来遊量によって決まります。1歳魚と2歳魚の来遊量は、マアジ新規加入量調査から得られる加入量指数※

（図3）ならびに山陰沖の水温との間に相関関係が見られます。平成23年度第1回日本海海況予報（水産総合研究センター日本海区水産研究所、4/6公表）で予測されているように日本海西部の対馬暖流の50m深水温が平年並みで経過するとすれば、1歳魚（大きさ15～20cm：H22年生まれ）は前年を上回り、2歳魚（大きさ20～25cm：H21年生まれ）は前年並みと予測されます。これから山陰沖に加入してくる0歳魚（大きさ5～15cm：H23年生まれ）の豊度は今後調査予定ですが前年並みとし、1歳魚が漁獲の大半を占めると考えれば、全体の来遊量は前年を上回ると予測されます。

※加入量指数が高いほど豊度が高いことを表します。詳しくはトビウオ通信 H22年第6号 http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/umi_sakana/tobiuo/index.data/2010no06.pdf をご覧ください。

マサバは前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域における大中小型まき網によるマサバの漁獲量は、近年上向きですが資源水準は依然として低い状態にあります（図4）。平成22年の漁獲量は6万2千トンで前年の9割でした。

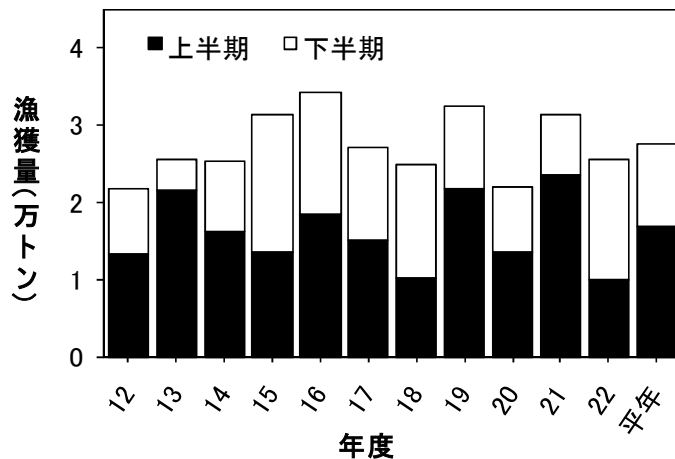


図2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（年度別）

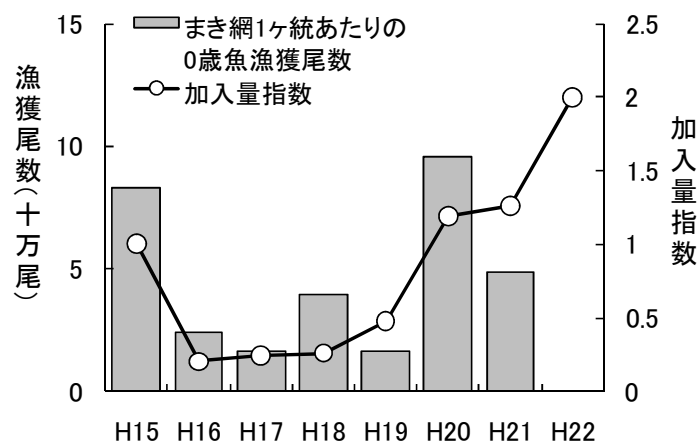


図3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と6～12月におけるまき網（境港）1ヶ統あたりの0歳魚の漁獲尾数

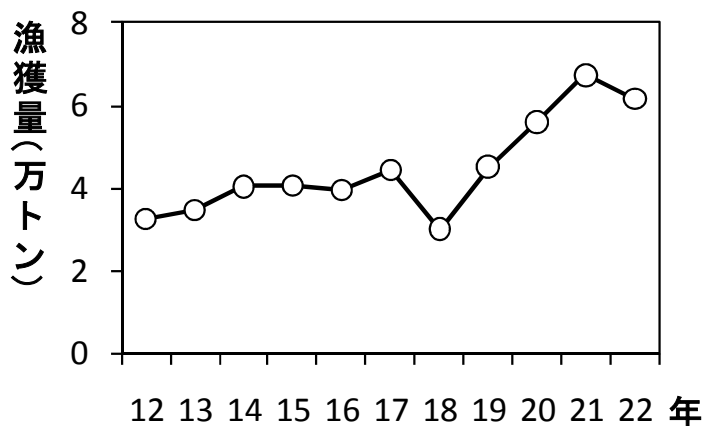


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中小型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、主漁期にあたる下半期の経年変化をみると、増減を繰り返して推移しています。平成 22 年度下半期の漁獲量は 11,048 トンで、前年同期（13,033 トン）の 9 割、平年同期（12,592 トン）の 9 割となり、前年・平年並みの漁況でした（図 5）。

今期は盛漁期にはあたらないため、今後漁獲は低調に推移しますが、1 歳魚（25～30cm：H22 年生まれ）が主体に漁獲され、夏以降は 0 歳魚（15～20cm：H23 年生まれ）も漁獲されます。1 歳魚の資源水準は前年を上回るとされています。また、0 歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因（海水温が低水温傾向）からみると前年並みと予想されるため、全体の来遊量は前年を上回ると考えられます。

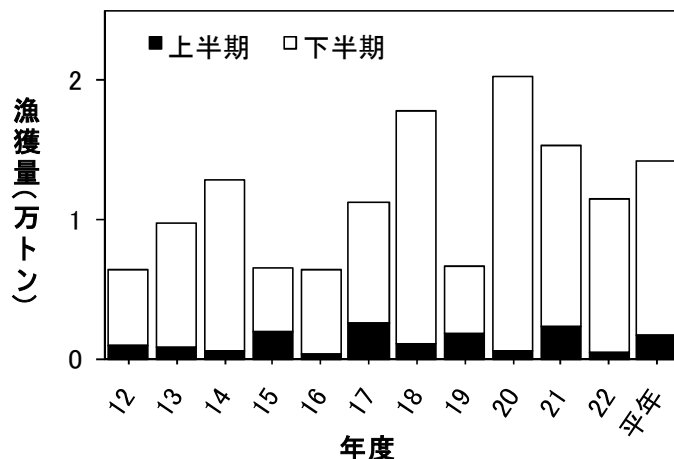


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（年度別）

カタクチイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成 13 年度以降増減を繰り返して推移しています。平成 22 年度下半期の漁獲量は 4,395 トンと、前年同期（3,120 トン）の 1.4 倍、平年同期（5,180 トン）の 9 割でした（図 6）。

今後の漁況は、漁獲の主体となる 0 歳魚（大きさ 5～10 cm：H23 年生まれ）と 1 歳魚以上（大きさ 12～14 cm：H22 年以前生まれ）の来遊量で決まります。H21 年生まれ以降のカタクチイワシは同程度の水準にあると推測されています。また、予測が困難な H23 年生まれを産卵親魚の漁獲状況から判断して前年並みとし、近年の山陰沖では本種は 3～4 月にまとまって漁獲される傾向が強いことを勘案すると、今期は 4 月に前年並みの来遊状況と考えられます。

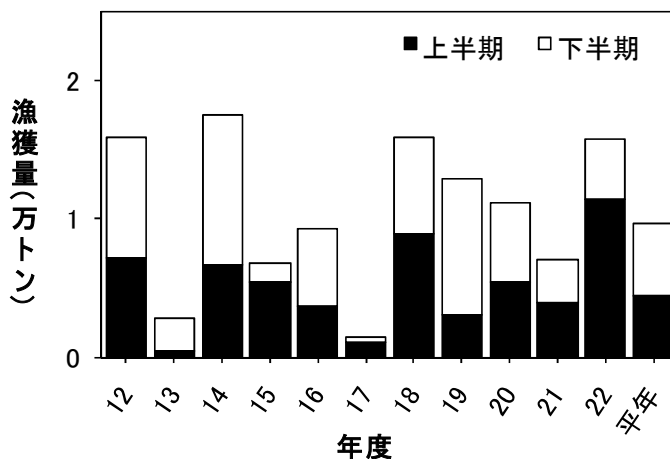


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（年度別）

ウルメイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成14年度以降はやや増加傾向にあり、平成22年度下半期の漁獲量は4,631トンと前年同期（1,876トン）の2.5倍、平年同期（2,606トン）の1.8倍と好調でした（図7）。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1～2歳魚（大きさ18cm以上：H22年～H21年生まれ）と夏以降の0歳魚

（大きさ5～15cm：H23年生まれ）の来遊量で決まります。産卵親魚として来遊する1・2歳魚の資源量は前年並みの水準と考えられています。また、0歳魚の水準は予測困難ですが、親魚量から考えると前年並みとが期待でき、全体の来遊量は前年並みと考えられます。

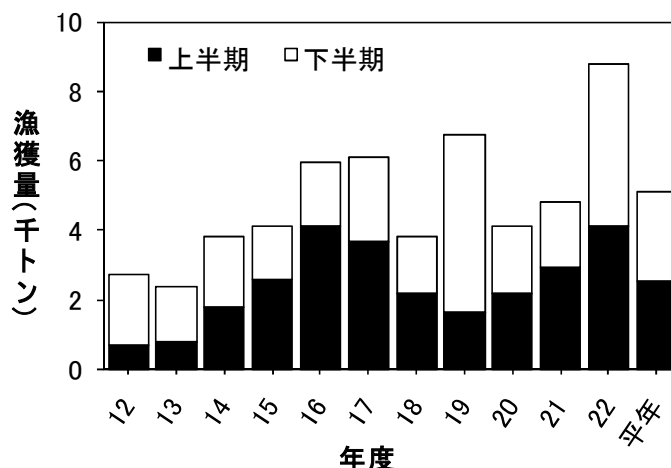


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移 (年度別)

マイワシは低調ながら前年を上回る

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は平成15年以降回復傾向にありましたが、平成22年度下半期の漁獲量は225トンと前年同期（1,404トン）の2割、平年同期（1,279トン）の2割と低調でした（図8）。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1～2歳魚（大きさ15～20cm：H22年～H21年生まれ）と夏以降の0歳魚（大きさ15cm以下：H23年生まれ）の来遊量で決まります。

沿岸域での漁況の経過から1～2歳魚の水準は前年を上回り、予測が困難な0歳魚は前年と同程度と考えられています。近年、マイワシ全体の資源量は回復の兆しがみられるものの、その水準は依然として低く、不安定で散発的な漁況が続いています。従って、全体の来遊量は低調ながらも前年を上回ると考えられますが、散発的な漁況に留まり、以前のような豊漁は当分望めないと思われま

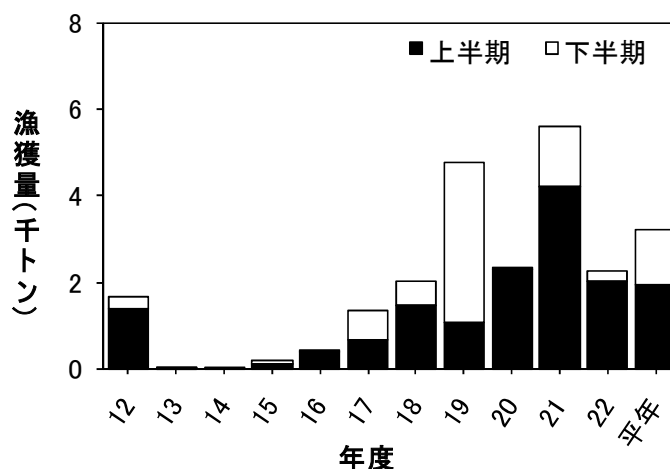


図8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移 (年度別)